

アカツメクサ (ムラサキツメクサ)

Trifolium pratense

マメ科

名前の由来

赤（もしくは紫）の花をつけるツメクサという意味。ツメクサは類似種のシロツメクサに由来し、江戸時代にオランダからガラス器具を運ぶ際、割れないように箱の隙間に詰めた干し草に混じったタネからシロツメクサが咲いたことから、名が付いたという。一般にはアカツメクサの名でよばれるが、はじめにつけられた名前はムラサキツメクサだった。漢字名：赤(紫)詰草



アカツメクサ

形態的特徴

高さは20～60cmになり、全体に毛が多く、茎は立ち上がる。葉は三つ葉状に3枚の小葉に分かれ、それぞれの小葉は卵形で、中央に淡い八の字形の模様が入ることが多い。葉柄の基部に細長く大きめの托葉があり、茎を抱く。花は紅紫

色、まれに白色で、多数の小花が集まって球状の花序になり、茎頂にひとかたまりずつつく。群生することが多く、低く敷きつめられた緑の三つ葉の中で、紅紫色の球状の花が群れて咲くという光景がよく見られる。

類似種と見分け方

シロツメクサ・タチオランダゲンゲ。

両種とも三つ葉で球状の花を持ち、外見はアカツメクサとよく似るが、花の色が異なるため開花時期は見分けやすい。花の色は、シロツメクサは白色、タチオランダゲンゲは淡

紅色～白色。アカツメクサの全草に毛があるのに対し、シロツメクサ、タチオランダゲンゲは全草無毛なので、花が無い時期は毛の有無で見分けることができる。



アカツメクサ。全草に毛が生える



タチオランダゲンゲ



シロツメクサ

生活サイクル

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
開花期			■									
結実期				■								

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(水辺)
鳥類

(草原・樹林)
ワシ・タカ
鳥類

生育環境・分布

草地や畑、道端などで普通に生育し、よく群生する。

分布：国外分布は、ヨーロッパ原産で世界中の温帯域に帰化している。

国内分布は、全国に帰化している。北海道内分布は、全道。十勝地方では、草地や畑、道端などで普通に見られる。よく群生する。



アカツメクサ

生活史

開花時期：6～9月

開花までの年数：不明

寿命：多年草

他生物との関わり

根には根粒とよばれる小さな球状のコブが付いていて、その中には多数の根粒菌がつまっている。アカツメクサは光合成により生産した糖類を根粒菌に供給し、その代わりに根粒菌は空中の窒素を使って生産したタンパク質をアカツメクサに与えるという、両方に利益のある、相利共生関係が成立している。



アカツメクサ

興味深い話

■明治年間のはじめから飼料作物として導入され、各地で栽培された。

■アカツメクサ（ムラサキツメクサ）は根粒菌と共生関係にあり、光合成で生産した糖類を根粒菌に供給する代わりに、根粒菌が生産するタンパク質を受け取る。そのためアカツメクサは全草にタンパク質を豊富に含み、農作物の植え付け前に緑肥として栽培して土にすき込むと、土を肥沃にし地力を高める効果がある。

■牧草としても優れ、刈り取って飼料、乾草用にも利用される。

■山菜として若芽や、開きかけた若い花が食べられる。若芽はゆでて水にさらし、あえものや油炒めにし、花はゆでた後三杯酢で食べると美味しい。また花は、ホワイトリカーに漬けて花酒したり、砂糖と煮詰めて裏ごしし、ゼリーとしても楽しむことができる。



アカツメクサ

魚類

底生動物

両生類
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)
草花

(外来種)
草花

哺乳類

(鳥水辺)
類

(葦原・鳥シタカ)
樹林類

参考文献

「日本帰化植物写真図鑑」清水矩宏・森田弘彦・廣田伸七 全国農村教育協会 2001

「北海道帰化植物便覧 2000年版」五十嵐博 北海道野生植物研究所 2000

「北海道植物図譜」滝田謙讓 自費出版 2001

「名前といわれ 野の草花図鑑3」杉村昇 偕成社 1987

「図説 花と樹の大事典」木村陽二郎・植物文化研究会・雅麗柏書房 1996

「新版 北海道山菜図鑑」佐藤孝夫・小林隆正・久保秀樹 亜璃西社 2002